

オーストラリアの言語と社会

岡村 徹

はじめに

言語学の分野では、オーストラリアの諸言語をわかりやすく解説した本がほとんどない。このような状況では、一般の人にオーストラリアに目を向けてもらえるはずがない。ここではその点に留意しながら、試験的な教材として、できるだけわかりやすく、かつ興味を持ってもらえるよう配慮した。とは言え、オーストラリアの言語的世界は雑多である。1人の教師ができることには限界がある。しかしながらこのノートを通して読者に2つのことは理解していただけるかと思う。1つはオーストラリアにおける言語の多様性であり、もう1つはその多様性こそがオーストラリアの人々の生活を可能にしているということである。日豪の言語学者の紹介をしながら、一人でも多くの方がオーストラリアの言語に、そしてオーストラリアの人々に興味を持ってもらえれば幸いである。

1 オーストラリアの言語的世界

1.1 オーストラリアの英語

今日、約3億5000万の人が英語を母語としている。加うるに少なくとも4億の人が英語を第二言語としている。また英語は宗教やイデオロギーの別を超えて、通商・政治の言語として世界中で用いられている。おそらく総計10億以上の方が英語を用いていると推定され、これは世界人口の少なくとも4分の1に相当する。(マックラム 1989:50)

一口に10億人といっても、英語を使つてのコミュニケーションには三つの型がある。

- (1) 英語母語話者同士
- (2) 英語母語話者と非英語母語話者
- (3) 非英語母語話者同士

(1)は、例えばオーストラリア人とニュージーランド人が英語でラグビーの話に夢中になっている場合、(2)は、日本人商社マンが英語でオーストラリア人と商談をしているような場合、(3)は、シドニーのタロンガ動物園を訪れた日本人と中国人観光客が英語を使って、コアラは

かわいいなどと会話をしているような場合に該当する。

インドの言語学者である B. カチュール (Kachru, Braj) (1986) は世界の英語圏を三つに分けた。まず英国や米国におけるように、英語が母語として話される国がある。二番目に、もともと別の言語があったが、フィリピンやナイジェリアのように英語が公用語として話されている国がある。三つ目に、日本やデンマークのように英語が商用や外国語教育の中で強調される国がある。カチュールによるとフィリピンの英語も米国の英語も対等の関係にあり、上下の関係ではありえないという。この主張は、日本の英語教育界に多大な影響を及ぼした。

もちろん約1900万人の人口を有するオーストラリアは、上記のうち、英語を母語とする国として位置づけられる。2000年に発行された『オーストラリア年鑑』(ただし1996年の国勢調査にもとづく)によると、オーストラリア生まれの地域社会言語話者の場合、5才以上24才未満が95.5%、全体の年齢層でも82.4%の人たちが英語を話すという。

歴史的には、1770年にJ. クック (Cook, James) によってオーストラリアは発見されるが、それから20年もしないうちにオーストラリアに流刑植民地ができるのであった。これは英国において、犯罪者を収容する施設に限界があり、新たに植民地を探す必要性に迫られていたからだ。移住者の中には、自由を求めてわたって来るものもいた。こうした事情もあってオーストラリアの人口は1900年までには400万人前後に膨れ上がった。このような背景があるため、平均的なオーストラリア人は長い間、自分たちの母言語に対して劣等感を抱いていた。そのような態度は映画の製作にも現れていて、オーストラリアなまりの英語は徹底的に修正の対象となり、わざわざ英国の標準英語に近づける努力をした。今日では、第二次世界大戦後、特に、英国離れが進行していること、多文化主義を採用していることなどが理由となってオーストラリア人の自国語への劣等感も払拭されているかのようにも見える。一説には、オーストラリアのあるお笑い芸人が笑いでもって、オーストラリア人の英語に対する劣等感を取り払ったとする説もあるが、いずれにしてもオーストラリア英語を取り巻く環境が大きく変わりつつあることはまちがいない。

オーストラリア英語は、社会的威信とのかかわりで次の三つに分類される。(クリスタル 1989)

1. 教養オーストラリア英語

この発音は話者によっては教養ある南部イギリス英語に非常に近く、ある母語とイントネーションにおいてオーストラリア起源であることをごくかすかに感じさせるにすぎない。全人口のおよそ10%が話す。

2. 俗オーストラリア英語

ポール・ホーガンやバリー・ハンフリーズなどの喜劇役者が演じる人物から、外国人には

もっとも明確に「オーストラリア英語」と認められるタイプである。国民の30%によって使用される。

3. 一般オーストラリア英語

教養オーストラリア英語と俗オーストラリア英語の中間に存在する連続体で、大多数の国民に使用されている。

(クリスタル 1989:376)

最後に、語彙を対象をしぼってオーストラリア英語を具体的に観察しよう。以下の資料は大修館の『英語学事典』の巻末の資料を参考にし、要約したものである。

1. 初期植民地時代から残存する語 *pom, Pommy* 「(侮辱的に) イギリス人の入植者, イギリス人, *sheila* 「むすめまたは女(侮辱的な言い方ではないが、女性は自分がそう呼ばれるのを好まない)」 2. 植民者の新造語 *outback n.a.* 「入植した地域から離れた地方(の)」、*bushfire* 「森林地帯でいったん生じると広範囲に拡がっていく火事」 3. 原住民の諸言語からの借入語 *dingo* 「オーストラリア産の野性の犬の名, ディング: 臆病で節操のない」という評判なので、人間に当てはめて言えばひじょうに侮蔑的なことばとなる」、*boomerang* 「ブーメラン」 4. アメリカ英語からの借入語 *bar* 「砂洲」、*prospect* 「洗鉢の皿から出て来る金」。(松浪ほか 1983:1064-1068)

オーストラリアでは日常的に指小辞 *-ie* がよく使われる。例えばポーカー・マシンのことを *pokie*、大きいものを *biggie* という。筆者もたびたびオーストラリアを訪れるが、マクドナルドのことをマッキーと呼んでいたオーストラリアの若者がいた。オーストラリアの新聞に目を通せば、すぐにそうした表現に出会う。特にスポーツ記事のところでは出現頻度が高い。

1.2 オーストラリア英語と社会

オーストラリア英語の研究には、大きく二つの方向性があると考えられる。一つは、ある方言学的現象が英語圏全般において認められるかどうかを探っていく方向性、もう一つは、オーストラリア英語にしか認められないという特殊性を探っていく方向性がある。例えば *-ing* の発音に関して、非標準的な発音 *~in'* は女性よりも男性の方が多く行うことが、英米のみならず、オーストラリアでも報告されている。これに対して、オーストラリアの英語は、他のどの地域の英語の変種よりも、三人称単数の動詞語尾 *s* が脱落しにくいことが報告されている(エイシコビッツ 1991:237)。オーストラリア社会では英語が圧倒的に優位であり、非英語系言

語の文化的・社会的機能は小さい。多くの人々にとって、英語は第一言語であり、政府、教育、裁判所、ビジネス、日常生活の言語でもある（ガイ 1991:214）。

一般にオーストラリア英語には地域差がないと言われる。しかし、1991年に、D. ブラッドリー（Bradley, David）は地域方言研究の可能性を示した。オーストラリア英語の母音について研究したのである。ブラッドリーはオーストラリア人の中に、castle の発音を行う際、二通りの方法があることに目をつけた。そこで、メルボルン、シドニー、ブリズベーン、ホバート、アデレードから合計 47 名の資料提供者を対象に面接調査をした。年齢は 18 才以上で男女半々。階級は労働者階層と中産階層の二つに分けた。次の表は /æ/ の発音がどのような音声的環境で発音されやすいかを示すと同時に、それが地域的にどう違うかをも示している。

表 1 /æ/ が発音される音声的環境（数字はパーセンテージ）

	鼻音の前で	摩擦音の前で	差
ホバート	93	38	55
シドニー	30	11	19
ブリズベーン	42	31	11
メルボルン	42	40	2
アデレード	9	14	-5

出所 ブラッドリー（1991:230）をもとに作成

アデレードを除けば、摩擦音よりも鼻音の前で /æ/ が発音されやすいことがわかる。特にホバートではその差が著しい。逆にメルボルンではほとんど差がない。より体系的・組織的な研究を行うことにより、オーストラリア英語の地域差の全貌が明らかとなろう。シドニー英語の発音と社会的差異の研究をした B. ホーバス（Horvath, Barbara M）も忘れてはならない。

シドニー大学の E. エイシコビッツ（Eisikovits, Edina）は、1991年に、シドニー英語の社会的差異について研究した。分析資料は、オーストラリア生まれの 40 人の若者が対象である。その内訳は平均年齢 13 才の男女が 20 名、平均年齢 16 才の男女が 20 名で、面接をして、50 時間分の会話資料を録音した。年齢や性別との関係について報告した。それによると、女子の集団よりも男子の集団の方が *don't* と *doesn't* の混用を起こす率が高いということを指摘し、さらに女子の集団の場合は年齢が違っても混用を起こす率にたいした変化はないが、男子の集団の場合は 35%も上昇している点を挙げている。平均年齢 16 才の男子の集団の間で、高い割合で生じる *don't* は男らしさや仲間集団への帰属意識を示す標識のようなものであるという。

表2 *don't* と *doesn't* の混用 - 性差および年代差

平均年齢 13 才の女子	平均年齢 16 才の女子
人数 = 10 名	人数 = 10
出現率 3/63	出現率 5/77
%=4.8%	%=6.5
平均年齢 13 才の男子	平均年齢 16 才の男子
人数 = 10 名	人数 = 10
出現率 13/78	出現率 31/60
%=16.7	%=51.7

出所 エイシコピッツ (1991:239) をもとに作成

似たような例は、すでに英国や米国でも報告されている。高校生ぐらいになると大人とは違った言い方を好み、自分たちの存在を訴えるようになる。オーストラリアでも例外ではない。

1.3 オーストラリアの先住民語

一般にアボリジニは約5万年前に、まだアジアと陸続きだった頃にアジアからオーストラリアにわたって来たとされる。白人との接触を始めてもった18世紀の後半には、約250の言語が話されていたとされる。2000年に発行された『オーストラリア年鑑』によると現在のアボリジニの言語の数は48とされている。白人との接触当初、白人による殺害や白人のもちこんだ病気によって多数の人口が失われたことが直接の言語の衰退につながった。

系統的にはオーストラリア諸語は、パプア諸語およびオーストロネシア諸語と区別される。アボリジニの言語は大きく二つに分類され、それぞれパマ・ニュンガン語群と非パマ・ニュンガン語群とがある。しかしながら万年という時間が経過しているため、比較言語学の作業には限界があり、その言語間の関係や多様性を説明できていない。B. コムリー (Comrie, Bernard) ほか (1999) の『世界言語文化図鑑』によると、オーストラリア南部一帯のパマ・ニュンガン諸語は文法的にかなり類似しているという。まず接辞に関しては接尾辞をとる言語が圧倒的に多く、接頭辞は存在しない。また、パマ・ニュンガン諸語の大部分で“手”を意味する語彙は、*mara* または *mala* と表現されるという。“耳”は *pina* と表現され、これも共通しているという。その他の語彙についてはきわめて多様で、類似点が少ない。多くの言語学者は、これらの言語がある共通の祖先となる言語から枝分かれしたものであると考えているという。一方、北西部にある非パマ・ニュンガン諸語はパマ・ニュンガン諸語以上に多様性を有していて、おそらく何千年以上も前に話されていたオーストラリア祖語から枝分かれした可能性があるという。

近年におけるアボリジニ研究は、絵画、神話、文化人類学、犯罪、教育など多岐にわたっているが、言語学研究の課題は多い。オーストラリアでは、B.J. ブレーク (Blake, B.J.) や R.M.W. デイクソン (Dixon, R.M.W.) といった有名な言語学者のあとにも若手の研究者が続いているが、日本では研究者の数が少ない。東京大学の角田や京都精華大学の細川の研究はよく知られている。

角田 (1999) は西オーストラリア州のジャル語を研究した。角田によるとジャル語は音素としては、/ a, i, u / の三つの母音で、子音音素は / b, g, d, rd, dy, m, ng, n, rn, ny, l, rl, ly, w, y / の15あるという (ただし r 音は除く)。日本語との関連で特筆すべき点として、まずジャル語には、閉鎖音に有声と無声の対立がないことを挙げている。したがって「兄」の発音の仕方をめぐって、[baba] でも [papa] でも、意味の違いがないことになる。次に日本人には容易に区別できない、鼻音での対立の例として、/ manan / 「取る (現在形)」と / marnan / 「話す (現在形)」がある。さらに巻き舌の r としての / rr / と、やや反り舌で発音する / r / の二つの音素の区別になると、もっと日本人には難しいという。

オーストラリア原住民語の文法では能格という現象を取り上げている (以下の例文も、すべて角田 1999:42-49 より引用)。日本語では他動詞の主語と自動詞の主語は同じ格であらわし、他動詞の目的語は別の格であらわす。

(1) 男が (他主) 水を (他目) 飲んだ。 (角田 1999:45)

(2) 男が (自主) 座った。 (角田 1999:45)

しかしオーストラリアの先住民語の中には、自動詞の主語と他動詞の主語を同じ格であらわし、他動詞の主語を別の格であらわす言語がある。

(3) bama-nggu (他主) gamu- (他目) bija-n (角田 1999:45)
男 能格 水 絶対格 飲む 非未来
「男が水を飲む / 飲んだ。」

(4) bama (自主) nyina n (角田 1999:45)
男 絶対格 座る 非未来
「男が座る / 座った。」

nggu という接尾辞が能格を、ゼロ接尾辞が絶対格を示している。

一方、細川は、オーストラリア北西部、キンバリー地方で話される先住民語であるヤウル語を研究した。ヤウル語の能格について、接尾辞-*ni*は、他動詞文の主語をあらわすとき、自動詞文の主語や他動詞文の目的語はゼロ形態になるという。

(5) Wamba-ni inabilgan kamba jurru. (細川 1992:530)
 男 能格 殺した その 蛇 (絶対格)
 「男が蛇を殺した」

(6) Wamba inabunanda kamba-ni jurru.
 男 (絶対格) 咬んだ その 能格 蛇
 「蛇が男を咬んだ (男が蛇に咬まれた)」

(細川 1992:530)

1.4 オーストラリア先住民語と社会

言語と文化のかかわりで興味深い事例を挙げよう。これは社会言語学的にも重要である。角田によると、ジャル語には、日本語の尊敬語に似ていると思われる敬遠体というものが存在する。日本語の場合との大きな違いは次の二つであるという。

(a) これらの表現の使用を決める条件は、日本語の尊敬語では身分や年齢などの上下関係である。一方、ジャル語の敬遠体では親族関係である。

(b) 日本語の尊敬語の使用は一方通行である。尊敬語は、下から上に使うが、上から下へは使わない。一方、ジャル語の敬遠体の使用は両方通行である。敬遠体は、男が義母について語る時に用いるし、また逆に、義母が娘の息子について語る時にも用いる。

(角田 1999:48)

角田の収集した例文は次の通りで、(7)が日常体、(8)が敬遠体である。

(7) nga= yan i murla nggawu (角田 1999:47)
 C=3単数・主格 来る 過去 ここ 方向格
 「彼 (または彼女) がここに来た。」

- (8) nga=lu luwarn-i murla-nggawu
C=3 複数・主格 なさる 過去 ここ 方向格
直訳：「彼らがここになさった。」

(角田 1999:48)

現地調査を行う言語学者にとって、文法書や辞書を残すことは、誇りであり、また大きな社会への貢献をすることになる。角田(1996)はオーストラリアには、まだ文法書がない言語がたくさんあり、しかも話者人口が減少し続け、死滅寸前である言語も多いという。このような作業は、原住民社会への還元という意味でも重要である。例えば教育の現場がその好例である。

1.5 オーストラリアのピジン・クレオール

ピジンとは、「二つまたはそれ以上の言語の単純化された混成語で、共通語をもたない人たちの伝達手段として使われるもの」(現代言語学辞典 1987:501)とある。またクレオールとは、「ピジンが、ある言語共同体に属する多くの人々の母語となる時、その言語はクレオールである」と一般に定義される」(現代言語学辞典 1987:501)とある。

豪アデレード大学の P. ミュールホイズラー (Mühlhäusler, Peter) (1991) によると、オーストラリアのピジン・クレオール言語学の対象となるのは次のものを含む。

- () 東部沿岸のアボリジナル・ピジン英語
- () 西オーストラリア州のピジン英語
- () 中国ピジン
- () メラネシアピジン
- () マカッサリーズピジン
- () ブルームや木曜島におけるマレーピジン
- () ココス島やクリスマス島のクレオール
- () ノーフォーク島のクレオール
- () バス海峡の英語
- () アボリジニの部族間で成立したピジン (Mühlhäusler 1991:164)

ミュールホイズラーは1985年に英語を基盤としたオーストラリアのピジンクレオールの数を5つとしていたが、1991年には上記のようにその数を10とした。この中には、現在でも文化的社会的に機能している言語(例えばノーフォーク語)もあれば、消滅してしまった言語(例えば中国ピジン)もある。ミュールホイズラーはオーストラリアにおけるピジン化、クレオール化

について、第一段階としてヨーロッパ人とアボリジニとの間で比較的不安定なジャーゴンが発達し、次にそれが先住民同士の共通語として発展していくという。そして最後にクレオール化するという。

もう一つのミュールホイズラーの功績は、ピジン語同士がどのように影響しあったかを示した点にある。例えばオーストラリア国内に持ち込まれた中国ピジンはカナカ英語やトレス海峡のブロークンの形成に寄与したと報告した。オーストラリアに中国ピジンがかつて存在したという可能性があるのは、オーストラリアに来た中国人が中国ピジンの話し手であったからであって、オーストラリアで成立したわけではない。ノーフォーク語の研究は岡村（1994）に詳しく報告されている。また細川（1992）はブルームの先住民英語を研究した。

1・6 オーストラリアのピジン・クレオールと社会

次にアボリジニ英語について触れておこう。I. カルダーと S. マルコム（Kaldor, Susan and Malcolm, Ian G.）（1991）によると、アボリジニ英語の本格的な研究は1960年以降からだという。かれらはオーストラリア国内で話されているクレオールとアボリジニ英語の違い（起源、文化的社会的機能の仕方、相互理解度）を述べたうえで、アボリジニ英語の構造について触れた。アボリジニ英語の種類としては次の4つを認めている。

第一グループ 都市部で話されているもの

第二グループ 北部および砂漠地域

第三グループ 北部のクレオール語社会

第四グループ 中間言語としての変種

（Kaldor & Malcolm 1991:73-75）

このうち、第一グループはシドニーの中心部に住むアボリジニの青少年を対象にした資料で、標準オーストラリア英語に近いとされる。第三のグループでは次のような言語特徴が報告されている。

(9)	Jim	bin	go	to	Derby	（Kaldor & Malcolm 1991:75）
	ジム	PTM	行く	P	ダービー	
	「ジムはダービーに行った」					

(12) の *tekeim* に接辞されている *-im* は他動詞をあらわす接尾辞である。ブロークンでもこれに相当する接尾辞がある。

(15) No ran diskain! (Shunukal 1991)
 NEG 走り回る そんなふうに
 「そんなふうに走り回るな」

(16) Rane em! (Shunukal 1991)
 追跡する 3単
 「彼を追い」

この文法要素はメラネシア的なもので、バヌアツやソロモンやニューギニアのクレオールにも備わっている。

(13) の包括複数 (聞き手を含む) / 除外複数 (聞き手を含まない) についても、ブロークンで観察できる。

(17) Melabat go luk. (Shunukal 1991)
 1pl 行く 見る
 「見に行こう」

アボリジニ英語は、今日かれらのアイデンティティを示す道具として、社会的な機能を見せるまでになった。それを使うことで仲間意識を高められる。アボリジニがアボリジニとしてのアイデンティティを保ちながら、非アボリジニと対等の教育を、そして対等の職業分野につくためには、標準オーストラリア英語に近いアボリジニ英語の習得が必要となってくる。しかし、それはアイデンティティを保つとは言え、英語を使うことにかわりはなく、伝統的なアボリジニ文化の衰退を促すという危険性もはらんでいる。

トレス海峡諸島の社会と言葉について研究をした大阪教育大学の松本博之 (1988) によると、南太平洋からこの島に移住してきた人々が使っていたピジン英語は徐々に、ちょうど明治以降の日本人による欧米志向のように文明のイメージを帯びた要素の一つとして島民に受けとめられていったという。そして次第に若者たちのあいだに流行し、一種の象徴として捉えられるようになったという。島びとたちは、神話や昔話において、差異を強調することにより自分たちの存在を訴えるようになったという。しかし白人との接触が増大する中、ピジン英語が英語ではないことに気づきはじめ、今度は劣等感を抱くようになったという。今日では大陸の方に家

族で移住し、子供に英語を学ばせ社会的幸福を得ようとするものや、逆に諸島のことばを自分たちのアイデンティティを確立するための有益な言語として位置付けるものもいるという。似たような状況は、筆者もノーフォーク島で観察した。オーストラリアとの関係を密にし、社会的幸福を得るべきとする立場と、島の伝統を保持すべきとする立場とに分かれる。そのような態度はかれらの言語使用にも影響を及ぼす。

松本によると、類型論的にはトレス海峡の社会と文化はアボリジニではなく、メラネシアに近い。トレス海峡がオーストラリアの領土内にくみこまれ、社会的経済的にパプア人との生活の格差がひろがっていった。そのためパプア人は依存的な立場に立ち、諸島民はいろいろなレベルで一段高いところに立つようになったという。社会言語学的に興味深いのはパプアのことばが相手をからかったり、ののしったりする機会にだけ用いられるようになったということである。社会構造の変革が言語使用に影響を与えた好例であろう。

1・7 オーストラリアの地域社会言語

モナッシュ大学の M. クライン (Clyne, Michael G) は、1990 年に、オーストラリアにおける地域社会言語の問題を論じた。地域社会言語とは、例えばイタリアからオーストラリアに来た移民が家庭や職場などで使うイタリア語を指す。これは社会的な機能をもった言語として、地域社会言語となる。

次の表はオーストラリア国内で最も幅広く使用されている地域社会言語の実態をあらわしている。

表3 最も幅広く使用されている地域社会言語

(1976年の国勢調査に基づく)

イタリア語	444,672
ギリシャ語	262,177
*ドイツ語	170,644
*セルボ・クロアチア語	142,407
*フランス語	64,851
オランダ語	64,768
ポーランド語	62,945
*アラビア語	51,284
スペイン語	48,343
*マルタ語	45,922

出所 クライン (1991:38) をもとに作成

上記の表からはイタリア語とギリシャ語の話者人口が圧倒的に多いことに気づく。これをさらに州別に見てみると次のようになる。便宜上三つの州に限定した。NSWは、ニューサウスウェールズ州のことで、州都はシドニーである。VIC.は、ビクトリア州のことで、州都はメルボルンである。QLDは、クイーンズランド州のことで、州都はブリズベンである。

表4 州別に見た家庭で使用される地域社会言語の割合 1986年

	NSW	VIC.	QLD
アラビア語	88,475	24,515	1,590
オランダ語	15,852	18,278	9,820
フランス語	20,256	14,803	6,807
ドイツ語	35,324	32,665	14,526
ギリシャ語	96,652	128,562	10,491
イタリア語	113,203	178,097	26,115
マルタ語	24,086	30,535	2,076
ポーランド語	21,362	22,920	4,889
スペイン語	42,783	18,556	4,770

出所 クライン(1991:42 - 43)をもとに作成

この表からイタリア系およびギリシャ系はメルボルンに多く居住していることがわかる。

その中で、地域社会言語から英語への転換は、その民族集団の分布、性別、結婚様式といった社会的要因が深くかかわっているという。年代差はそれほど重要ではない。まず女性の方が男性よりも地域社会言語を維持しやすいということに気がつかなければならない。この傾向は一世においても二世においても言えることで、しかも1976年におけるよりもその傾向が強く出ている。もう一つ気がつかなければならないことは、ハンガリー人、オランダ人、ドイツ人が言語転換の度合が高く、ギリシャ人が低い点である。

表5 オーストラリアにおける移民一世の言語転換 - 性別による

出生地	男子	女子	差
オーストリア	43.8	35.2	8.6
フランス	28.4	24.9	3.5
ドイツ	44.7	36.8	7.9
ギリシャ	5.5	3.3	2.2
ハンガリー	29.7	16.3	13.4
イタリア	13.3	7.2	6.1
レバノン	6.0	4.3	1.7
マルタ	28.4	23.3	5.1
オランダ	53.1	42.9	10.2
ポーランド	19.8	11.7	8.1
南アメリカ	11.3	9.3	2.0
スペイン	14.2	11.6	2.6
トルコ	4.1	2.8	1.3
ユーゴスラビア	11.9	6.7	5.2

出所 クライン (1991:62-63) をもとに作成

これは次のように説明できる。特に一世の男子は族外結婚が多く、ハンガリー人、オランダ人、ドイツ人は特にそうであった。逆にギリシャ人の場合は、地域的な分布、職業分野との関連性が指摘されている。このようにオーストラリアの移民の状況を正しく把握することは、移民の言語文化を保護していくという一面もあり重要である。

新聞やラジオやテレビでの使用状況はどうであろうか。新聞は何種類の新聞が発行されているのかを、ラジオは一週間に何時間放送されるのかを、テレビは一年間に何時間放送されるのかを示している。

表6 マスメディアとのかかわり 1986年の状況

言語名	新聞の種類	ラジオ	テレビ
アラビア語	7	17.75	33.95
オランダ語	3	21.0	46.06
フランス語	1	14.0	136.81
ドイツ語	3	31.0	197.09
ギリシャ語	15	68.0	123.53
イタリア語	10	51.5	255.63
マルタ語	2	20.5	-
ポーランド語	5	20.75	42.43
スペイン語	6	33.0	105.68

出所 クライン (1991:146 - 151) をもとに作成

これらの数字から、いかにイタリア語やギリシャ語が文化的社会的に機能しているかがわかる。従来の同化政策においては、こういった移民たちの言語は英語への一元化を迫られた。しかし1980年以降、多文化政策が本格化してからは、移民の言語文化をオーストラリアの文化的財産として位置付けるようになった。したがってオーストラリア人も地域社会言語を学び、双方向的な態度を要求されるようになったのである。

1・8 オーストラリアの日本語

近年、オーストラリアへの日本人観光客は80万人前後を推移し、すっかり観光地としてのイメージが定着したように思う。また日本経済が衰退したとは言え、日本人商社マンの役割が小さくなったわけではなく、質の高いビジネス機会が求められていることを考えると、ますます重要性を帯びてきたと言えよう。またオーストラリア研究も年々、学際的に行われるようになり、日豪の研究者の交流も多くなった。高等学校以下の文化交流もアメリカの同時多発テロ以降、増加傾向にある。政治レベルでの関心は21世紀になった今、ますます緊密なものになったと言えよう。このような状況で、いわゆる国際日本語と呼ばれることばが、オーストラリアのあちこちで聞かれるようになった。例えば、シドニーやゴールドコーストのみやげもの屋さんで、オーストラリア人の店員が日本人観光客に日本語を使ってコミュニケーションをはかったりする場合がそうである。また大学で日本語を専攻しているオーストラリア人学生が、日本人やオーストラリア人の学生と日本語を使ってコミュニケーションをはかっている場合がそうである。たとえ英語なまりの日本語であるとは言え、十分に意思疎通を可能なものになっている以上、それは国際日本語としての性格をもつものであると言えよう。

歴史的に見ても、日本人とオーストラリア人の接触は多かった。主なものを挙げると、クイーンズランドのさとうきび農園での日本人、ブルームやトレス海峡諸島での真珠貝採取にかかわった日本人、第二次世界大戦後の戦争花嫁などである。このうちクイーンズランドで、さとうきびの契約労働者として働いた日本人は、1892年から1911年の間で2651人いた。

表7 クイーンズランドの日本人（1900年8月31日における）

地区	男子	女子	合計
プリズベン&東モレトン	6	-	6.
イプスウィッチ&西モレトン	4	-	4.
ワイドベイ	34	16	50.
ダーリングダウンス	1	1	2.
マラノア	1	-	1.
ワレゴ	-	-	nil.
ポートカーチス	13	2	15.
ミッチェル	8	4	12.
マッカイ	239	11	250.
ヒューエンデン	8	7	15.
タウンズビル	616	16	632.
チャーターズタワーズ	9	9	18.
ケアンズ	484	34	518.
木曜島	1030	61	1091.
ノーマントン	15	8	23.
	2468.	169.	2637.

出所 マッキー（1998:26）

出身は熊本県出身者が35%、和歌山県出身者が18%、広島県出身者が10%いた。N. マッキー（Mckay, Nathan）氏によると日本人労働者は勤勉で、着実に労働をこなし、クイーンズランドの砂糖産業に果たした貢献度はきわめて大きいという。マッキー氏の収集した資料には、日本人契約労働者の人数、さとうきびを刈る日本人労働者の様子、ある日本人契約労働者の一日の食事の割合を表した表、日本人が暮らした住居、日本人労働者に支給された衣服、白人と有色人種の割合などを示した貴重な資料がある。残念ながら、日本人の言語生活について記した論文および書物はこれまでのところ存在しない。今後の言語学研究を待たねばならないところである。

その点においては、戦争花嫁や真珠貝採取労働者の使った日本語の実態もわかっていない。ただ木曜島の日本人ダイバーとの接触をもったアイランダーズの中には、いくらかの日本語を生活の中で用いたことが報告されている（チェイス 1981:15）。表中にある AJP は、アボリジナル・ジャパニーズ・ピジンのことである。また、“黒んぼ”という表現は差別語であり、今日では一般に使用できないが、原文のまま記したことを断っておきたい。

表 8 アボリジニ語の中の日本語

AJP	意味	語源
ikuramu	行こう	行く
umay	女	お前?
churumpu	黒人	黒んぼ
sagi	飲み物	酒
kuyima	戻って来い	来い今
ma nandu idi nu	大きいやつ	まあ何と大きいの
misaduru	食事する	飯食らう
atama	人の頭	頭
namaku	なまこ	なまこ
kami	亀	亀

出所 チェイス（1981:15）をもとに作成

おわりに

学生や一般人にわかりやすい教材の一例として、試験的に概略を記した。オーストラリアの多様な言語的世界を社会言語学的な視座から観察した。これを土台にして、各人の関心に応じた授業が教師によってなされれば幸いである。また一人でも多くの学習者が増え、授業を通じてより質の高い教材が作成されることが望ましい。今後の課題としては、より開放的な研究および教育環境を作り、資料の蓄積を継続していくことが重要であると考えられる。

参考文献

和文

- 岡村 徹「ノーフォーク語の行方」『英語教育』大修館書店、Vol.43 No.6 pp.48-50 1994年。
- 岡村 徹「オーストラリアン・サウス・シー・アイランダーズの言語と社会 - カナカ英語衰退の要因」『オーストラリア研究』第13号、オーストラリア学会編集 筑波書房、pp.21-32 2000年。
- クリスタル, D. (豊田昌倫訳)『英語 - きのう・今日・あす』紀伊國屋書店、1989年。
- コムリー, B. ほか編(片田 房訳)『世界言語文化図鑑 - 世界の言語の起源と伝播』東洋書林、1999年。
- 田中 春美編集主幹『現代言語学辞典』成美堂、1988年。
- 角田 太作「原住民の言語」月刊『言語』特集・オーストラリアの言語と文化、大修館書店、Vol.17 No.12, PP.28-35. 1999年。
- 角田 太作「オーストラリア原住民語の現地調査」『言語研究』日本言語学会発行、PP.149-160, 1996年。
- マックラム, R. ほか(岩崎春雄訳)『英語物語』文藝春秋、1989年。
- 松本博之「トレス海峡諸島の社会と言葉」月刊『言語』大修館書店 Vol. 17 No. 12 pp.54-59. 1988年。
- 松浪 有ほか編『大修館英語学事典』大修館書店、1983年。
- 細川 弘明「ヤウル語」三省堂『言語学大辞典』第4巻、PP.529-531. 1992年。

英文

- Australian Bureau of Statistics (2000) *Year Book Australia*. Canberra.
- Blake, B.J. (1987) *Australian Aboriginal grammar*. London: Croom Helm.
- Bradley, David. (1991)/æ/ and /æ:/ in Australian English. In Cheshire, J. (ed.), *English Around the World: Sociolinguistic Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chase, A. (1981) All Kind of Nation. *Aboriginal History* 5:1.
- Cheshire, J. (1991)*English Around the World: Sociolinguistic Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clyne, M (1991) *Community Languages: The Australian Experience*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R.M.W. (1980) *The Languages of Australia*. Cambridge: Cambridge University Press. Pacific Linguistics Series A-No.72.
- Eisikovits, Edina. (1991) Variation in subject-verb agreement in Inner Sydney English. In Cheshire, J. (ed.), *English Around the World: Sociolinguistic Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Guy, Gregory R. (1991) Australia. In Cheshire, J. (ed.), *English Around the World: Sociolinguistic Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Horvath, Barbara M. (1985) *Variation in Australian English: The Sociolects of Sydney*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kachuru, B. (1986) *The Alchemy of English: The Spread, Functions and Models of Non-native Englishes*. Oxford: Pergamon.
- Kaldor and Malcom (1991) Aboriginal English: An Overview. In Romaine *Language in Australia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mckay, N. (1998) *The Japanese Migrants' Contribution to the Queensland Sugar Industry*. The Historical Society, Cairns, NTH. QLD. INC.
- Mühlhäusler, P. (1985) The Number of Pidgin Englishes in the Pacific. *Papers in Pidgin and Creole Linguistics* No. 4 pp.25-51.
- Mühlhäusler, P. (1991) Queensland Kanaka English. In Romaine (ed.)
- Sandfur, J. (1991) A Sketch of the Structure of Kriol. In Romaine (ed.) *Language in Australia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schnukal, A. (1991) Torres Strait Creole. In Romaine (ed.) *Language in Australia*. Cambridge: Cambridge University Press.